

高齢者の人格的イメージ

— Big Five 尺度の適用による検討 —

森田 健宏

(奈良教育大学 大学院)

今井 靖親

(心理学教室)

A study on images for the aged with Big Five Scales of personality

Takehiro MORITA

(Graduate student of Psychology, Nara University of Education, Nara)

Yasuchika IMAI

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

Synopsis: The purpose of this study was to investigate the personality images for the aged people in University students and professional school students. The questionnaire terms were sampled from the pre-investigation and Japanese Big Five Scales of personality (designed by S. WADA; 1996). The main results appeared as follows: (1) Neuroticism factor was drawing the attention of University students and professional school students. (2) Openness to Experience factor was particularly rated low by University students.

Key words: images for aged, BFS (Big Five Scales of personality)

1. 問題

1994年の総務庁統計局の人口推計によると、わが国の全人口に占める65歳以上の高齢者の割合が14%に達していることが明らかにされている。さらに、厚生省の統計によると、日本人の平均寿命は、1986年に男性75.23歳、女性80.93歳となり、北欧アイルランドを抜いて世界一の長寿国となっている。これらの数値が如実に表すように、わが国の高齢化社会は既に確立しているといっても過言ではあるまい。

このような社会状況において、様々な点で高齢者への対応の立ち遅れが問題視されている。例えば、その一つとして高齢者の介護環境に関する問題があげられる(落合, 1996)。山井(1990)の調査によると、日本における高齢者の介護は、家族によって行われるケースが多いという。この理由として、落合は、施設や病院の設置状況が未だ充実していないことその他、社会的評価の問題、さらには、介護の対象や環境に対する抵抗感の問題などを指摘している。これに対して、福祉に関しては先進国であると言われるスウェーデンやフィンランド、デンマークなどでは、家族による介護はほとんどなく、介護福祉士などの専門職によって行われることが多いといわれている。これは、介護は専門的知識や技術を持った者によって行われることが、利用するものにとっ

でも最適であると考えられているためである。しかしながら、わが国の文化的背景や社会事情を考慮すると、専門職による完全介護の実施については、まだまだ議論の余地があると思われる。

このような介護に関する問題例からもわかるように、高齢者の増加が見られる一方で、これに対応する社会環境の整備はむしろ乖離の一途をたどっているような状況にある。そこで我々は、今後の社会を考えるうえで、高齢者に関する正しい理解が必要不可欠であると考え。一方、学校教育における高齢化社会に対応した教育実践という点から見ると、小学校「道徳」の一部でわずかに触れられている程度で、他の領域ではほとんどとりあげられていない。すなわち、小学校学習指導要領「道徳」には、その目標として、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かす」こと、また内容には「身近にいる若い人や高齢者に温かい心で接し、親切にする」、「生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する」、「父母、祖父母を敬愛する」ことなどが掲げられている。これらは、いずれも高齢者とのかかわり方について述べたものである。

今日の学校教育における生活指導の領域では、他者理解や共感的行動は重要な事項であるが、将来的には高齢者に対する基本的特性の理解及び望ましいかかわりについての教育が必須事項となることが予測される。そのためには、教育者である学校教師に、まず高齢者の特性やそのかかわりについての正しい知識や理解が求められる。

本研究では、高齢者社会に関する教育研究の一環として、まず高齢者に対する理解、とりわけ高齢者の人格的イメージに着目した。高齢者の人格に関する従来の研究例として、大西（1996）を挙げる。彼女は短大生、看護学生、ホームヘルパー研修生を対象に、老人のイメージを自由記述法で調査を行っている。その結果を、積極性、消極性、加齢老化の3特性に分類したところ、看護学生は高齢者の加齢老化に着目しやすいことを、また、ホームヘルパー研修生は高齢者に消極的イメージを持つものが多いことを見出した。また、保坂・袖井（1986）は、大学生を対象にSD法を用いて老人のイメージを調査したところ、「弱い」、「非生産的」、「遅い」、「強情な」などの否定的なイメージを持つ評定が多かった。

いずれの報告においても、高齢者に対する否定的・消極的なイメージの回答が多いこと、また、痴呆など老年期特有の、ごく一部の対象に見られる疾病のイメージが定着していることなどが明らかにされた。このような傾向は、大西や保坂・袖井の研究の調査対象と同世代である教員養成大学の学生にも同様に認められるであろうか。

本研究では、将来教職を志望する教育大学生を対象に、高齢者に対するイメージについての調査を行い、さらに、比較対象として、大学生と同世代であっても高齢者とのかかわりが多い介護福祉専門学校の学生についても同様に調査を行う。このように今日の若い世代の高齢者理解の実態を明らかにするとともに、今後の学校教育における高齢化社会についての教育のあり方を模索することを目的とする。

2. 予備調査

目的

高齢者のイメージを表す用語を自由記述法により回答させ、一般的傾向を把握するとともに、本調査の評定語彙の基礎資料を得ることを目的とする。

方法

高齢者の人格的イメージ

調査対象：介護福祉専門学校 1 回生83名（平均年齢18歳 7 か月）

調査内容：高齢者に対するイメージの調査（自由記述法）

調査時期：平成8年10月16日

材 料：調査用紙（B 5 版）1 枚：自由記述法により、高齢者に対するイメージを3つ記入できるように、記入欄が印刷されている。さらに、そのイメージを想起した理由を内省報告として記述する欄を設けている。

手続き：調査は、集団で実施した。被調査者に調査の趣旨及び回答方法についての教示を行った後、調査用紙を配付し、「あなたが抱く高齢者のイメージを3つ記入してください」と教示し、自由記述法により回答を求めた。調査終了後、担任によって調査用紙を回収した。

結 果 及 び 考 察

結果の処理は、回答を語彙ごとに累積集計した。その際、意味的に類似する語彙については、まず、本学大学院生4名が各自で包括的処理を行い、その後、合議によって、3名以上の一致があったものを類似語彙に採用した。

以上の結果処理によって集計された項目のうち、回答数の多い上位20項目を表1に示した。

全体的には、消極的なイメージをもつ回答が多いと言える。これは、調査対象者が、専門学校に所属している期間がまだ短いため、大西（1996）の結果と同様に、同世代の者が持つ一般的なイメージと、ほとんど変わらない結果になったと考えられる。

表1 高齢者のイメージ(自由記述法)

順位	回答数（回答率）	順位	回答数（回答率）
1	弱々しい 27 (13.4)	11	ぼけた 7 (3.5)
2	不活発な 16 (7.9)		怖い 7 (3.5)
3	頑固な 15 (7.4)	13	かわいい 5 (2.5)
4	暗い 13 (6.4)		難しい 5 (2.5)
5	汚い 9 (4.5)	15	かわいそう 4 (2.0)
	淋しそうな 9 (4.5)		病がちな 4 (2.0)
	鈍い 9 (4.5)		依存的な 4 (2.0)
	優しい 9 (4.5)		わがままな 4 (2.0)
9	話し好きな 8 (4.0)		孤独な 4 (2.0)
	寝たきりの 8 (4.0)		古い 4 (2.0)

まず、この調査において最も多い回答は「弱々しい」であった。具体的には、精神的側面をあげるものや身体的側面、社会的側面をあげるものなど、様々であったが、高齢者をあらゆる意味で弱者と捉えている点が注目される。さらに、この項目に関連して「かわいそう（15位）」や「依存的（15位）」、「助けてあげたくなる（23位）」などからも、“高齢者は支援を必要とする弱者の立場である”と捉えている者が多いと考えられる。また、「不活発な（2位）」や「鈍い（5位）」、「寝たきりの（9位）」などは、上記と同様に高齢者を弱者として捉えているが、これらは、身体的側面への着目している点に特徴がある。

次に、「頑固な（3位）」、「暗い（4位）」など、高齢者を気質的な面で内閉的、神経症傾向と

して捉えている点が指摘できる。これは、金子（1985）など、従来より、高齢者に対して言われてきた人格の傾向と合致しており、現代においても旧来と変わらず、高齢者の消極的な人格特性が着目されていることが伺える。

一方、「淋しそうな（5位）」、「話し好きな（9位）」、「孤独な（15位）」など、外向性にかかわる項目が上位にあげられている。このことは、高齢者を社会的な関わりから遠い存在であると捉えている者が多いことを示唆している。これに関連した内省報告からは、「身近な高齢者に話しかけるとうれしそうに昔のことを話すから」という記述が数多く見られた。このことから、高齢者の人格特性に関しては、比較的外向性に着目する者が多いと言えよう。

その他、5位に挙げられた「汚い」については、調査対象者となった学生が、ある特別養護老人ホームを訪問した際に、入浴が少ないことや、失禁への対応の不備などが多いためであると報告している。このように高齢者の外観的なイメージから回答している者や、高齢者自身に限らず、周囲の影響に注目している者がいることも明らかにされた。

以上の結果及び考察から、高齢者のイメージを捉えるにあたって、外向性や神経症的傾向など、いくつかの側面に分けて考える必要があることが確認された。

3. 方法

調査対象：教育大学学生100名（平均年齢19歳4か月）

介護福祉専門学校2年生80名（平均年齢20歳5か月）

調査内容：高齢者に対する人格イメージに関する調査（評定尺度法）

評定尺度の判断基準は以下に示す通りである。

調査項目の作成：本調査に使用する調査項目は、和田（1996）による Big Five 尺度を参考に、特に高齢者の人格特性に関連のあると思われる4因子（外向性・神経症的傾向・開放性・調和性）について、予備調査で挙げられた項目と合致するもの7項目ずつを選出した。

材 料：調査用紙（B5版）1枚：評定尺度法（6段階評定）によって、高齢者に対するイメージを回答できるよう、設問と回答欄が印刷されている。なお、調査項目の配列は同一因子が連続しないよう、ランダムに配置されている。

手続き：調査は、集団で実施した。被調査者に調査の趣旨及び回答方法についての教示を行った後、自由速度法により回答を求めた。調査の実施時間はおよそ20分を要した。調査終了後、

《判断基準》

	1	2	3	4	5	6
	←あてはまらない			あてはまる→		
1	（あなたの抱くイメージに） まったくあてはまらない					
2	（あなたの抱くイメージに） あまりあてはまらない					
3	（あなたの抱くイメージに） どちらかといえばあてはまらない					
4	（あなたの抱くイメージに） どちらかといえばあてはまる					
5	（あなたの抱くイメージに） かなりあてはまる					
6	（あなたの抱くイメージに） まったくあてはまる					

調査者が用紙を回収した。

4. 結果と考察

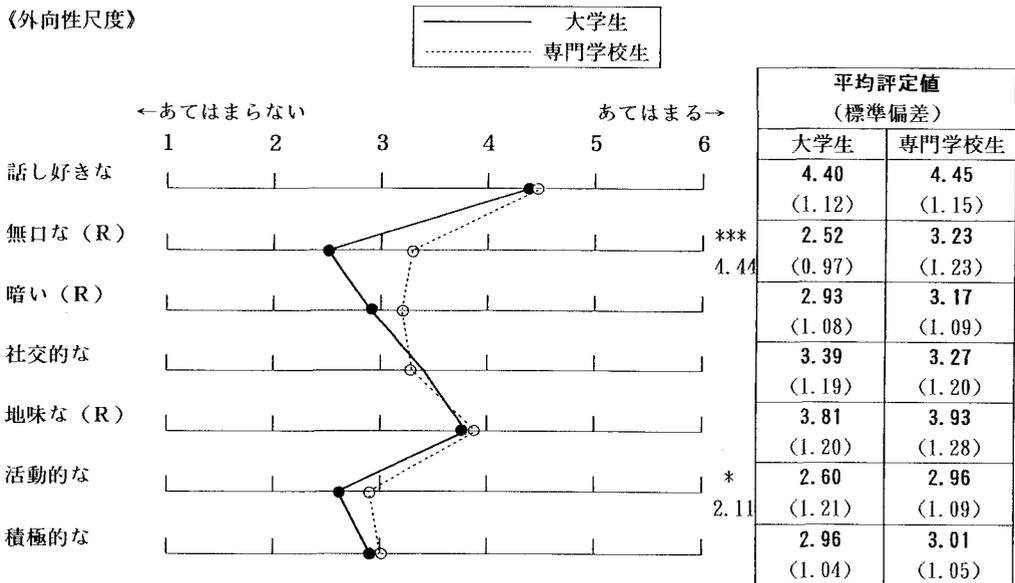
4.1. 外向性尺度について

この尺度は、人格的イメージのうち、外向性、すなわち高齢者の対外的な関わりのイメージを見るものであった。

図1は、外向性尺度に関する項目ごとの平均評定値のプロフィールである。この結果をもとに、大学生と専門学校生の意識差を見るために、項目ごとにt検定を行った。その結果、「無口な」が $t=4.44$, $p<.001$ で、また、「活動的な」が $t=2.11$, $p<.05$ でそれぞれ有意差が見られた。この結果は、保坂・袖井(1986)の結果と一致している。

「無口な」については、専門学校生の方が大学生よりも、「あてはまる」と考えていることが明らかにされた。この項目は意味的に逆転させると、「話し好きな」という項目と同義語となる。そこで、「無口な」について、大学生の評定値を逆転させると、「話し好きな」の評定値とほぼ一致する結果となった。しかしながら、専門学校生の評定値は、逆転させても中間的な意味合いを持つ位置、「どちらでもない」という位置にとどまった。このような差異は、どのように解釈すべきであろうか。これら項目の内容を再吟味すると、専門学校生は、高齢者との多くの関わりを通して、高齢者が潜在的には「話し好き」な一面があることを理解しているが、実際には、高齢者が主体的・積極的に自分たちに話しかけてくることは、どちらかといえば多くない、と受け止めていると考えられる。事実、高齢者への対応に関する事例集や専門学校生の実習記録など

《外向性尺度》



*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $.05<p<.10$
 記号の下に示す数値は t 値 (R) は逆転項目を表す

図1 外向性尺度のプロフィール

を見ると、学生側からの積極的な働きかけによって、高齢者との好ましい関係が形成されるという報告が多く見られる。さらに、本調査における「活動的な」や「積極的な」という項目が低い評定値であることから、高齢者による実際の積極的な活動はあまり見られないと考えていることが伺える。これに対して、大学生の場合は、親族等、ごく親しい存在でない限り、高齢者との関わりは少ないと思われる。そのような身近な経験を通して、高齢者の一般的なイメージとして、「話し好きな」、あるいは、「無口でない」と捉えていると考えられる。

4.2. 神経症的傾向尺度について

この尺度は、人格的イメージのうち、神経症的な傾向のイメージを見るものであった。

図2は、神経症的傾向尺度に関する項目ごとの平均評定値のプロフィールである。これらをもとに、大学生と専門学校生の意識差を見るために、項目ごとにt検定を行った。その結果、「不安な」が $t=4.00$, $p<.001$ で、「悲観的な」が $t=2.17$, $p<.05$ で、「悩みがちな」が $t=2.11$, $p<.05$ で、それぞれ有意差が見られた。

プロフィールを見ると、他の因子と比較して、神経症的傾向がかなり高い。このことから、大学生や専門学校生は、高齢者の様々な人格特性のうち、特に神経症的傾向に注目していると言える。

特徴的な項目については、「不安な」が大学生、専門学校生ともに最も高い評定値であった。さらに、この項目については有意差が見られたことから、専門学校生は、大学生よりも高齢者にとって「不安な」傾向はより強いものと捉えていることが明らかにされた。また、「心配性な」が、大学生、専門学校生ともに、「不安な」に次いで高い評定値であった。これらの特性は、心

〈神経症的傾向尺度〉

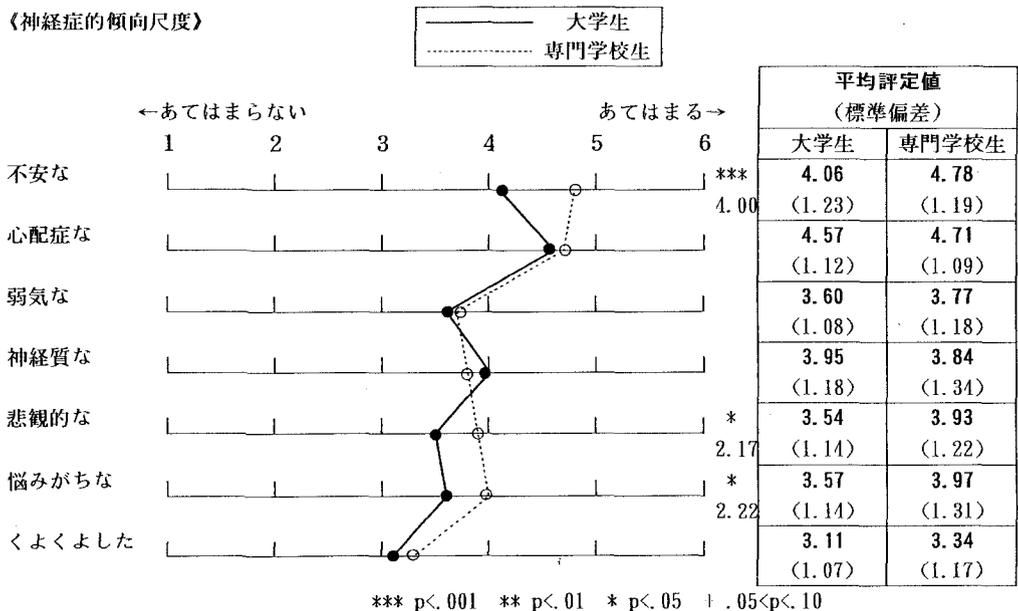


図2 神経症的傾向尺度のプロフィール

気性的傾向として、従来の研究に見られた結果と一致している。すなわち、大学生や専門学校生などの若い世代は、高齢者は自己の身体的・精神的変化や将来などの様々な点に不安を抱いており、とかく心配しがちな傾向にあると捉えていると思われる。また、「悲観的な」や「悩みがち」な」という項目では、専門学校生が大学生よりも、高く「あてはまる」と評定している。これらは、感情や言動に表出された特徴から捉えられるものであるところを考慮すると、やはり専門学校生が実習の高齢者との関わりの経験から得た知見ではなかろうか。

4.3. 調和性尺度について

この尺度は、調和性、すなわち周囲の環境との調和性のイメージをみるものであった。

図3は、調和性尺度に関する項目ごとの平均評定値のプロフィールである。これらをもとに、大学生と専門学校生の意識差を見るために、項目ごとにt検定を行った。その結果、「寛大な」、「素直な」における両者の差に有意な傾向が見られたが、その他の項目間では有意な差は見られなかった。このことから、高齢者の調和性に関しては、大学生と専門学校生との間に意識差はない、言い換えれば、この世代では、高齢者の、調和性に関しては、日常の経験などによる影響は見られずに共通した認識があると考えられる。

プロフィールにも表れているように、全体的な特徴としては、ほとんどの回答が評定尺度の中間に位置していることである。このことから、調和性に関しては高齢者は比較的偏りのない落ち着いた人格であると捉えられていると考えてよいのではないだろうか。

個々の項目について見れば、「温和な」、「親切な」が評定段階4を超え、「あてはまる」と受けとめられている。一般的には、高齢者に対するイメージには消極的・否定的なものが多いが、こ

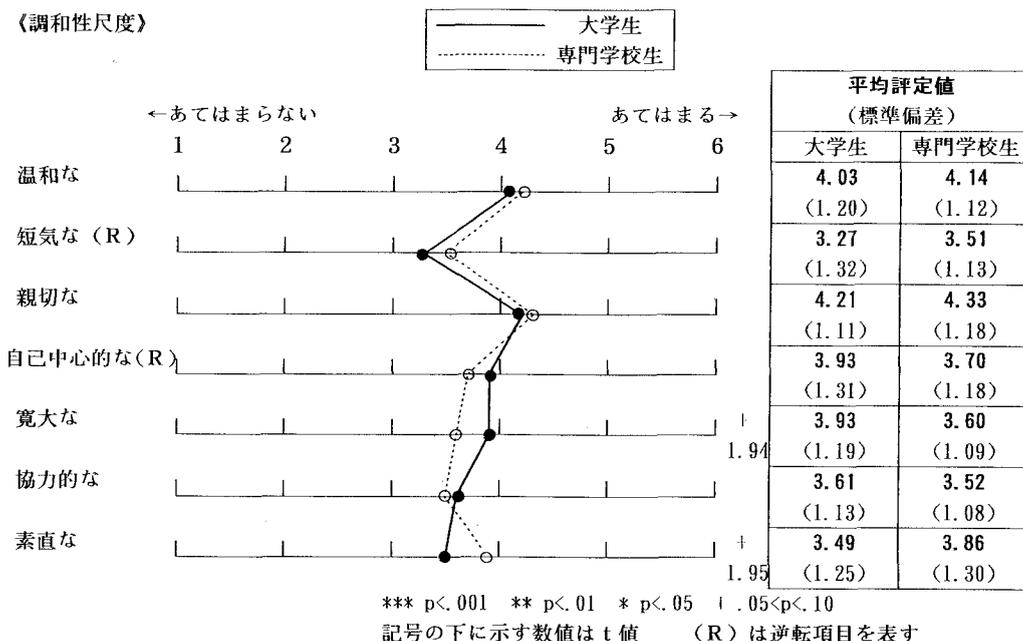


図3 調和性尺度のプロフィール

れら肯定的な項目のあることは注目されよう。この点については、保坂・袖井（1986）、守屋ら（1987）、菱沼ら（1995）のと同様の結果が得られている。このように、大学生や専門学校生など多くの若者に、高齢者が周囲に対し積極的に調和を図ろうとする、円熟型の人格である、と受けとめられていることは興味深い。

4.4. 開放性尺度について

この尺度は、開放性、すなわち個人の能力的側面に関わる人格特性のイメージを見るものであった。

図4は、調和性尺度に関する項目ごとの平均評定値のプロフィールである。これをもとに、大学生と専門学校生の意識差を見るために、項目ごとにt検定を行った。その結果、「好奇心が強い」という項目では有意差がなかったが、他のすべての項目で大学生の方が専門学校生よりも有意に低く捉えていることが明らかになった（「鈍い」については逆転項目となるため、開放性という観点から、実際は大学生の方が専門学校生よりも低く捉えていることとなる）。

開放性が低く捉えられていることについては、精神保健や医学などの研究領域における高齢者に関わる様々な文献からも、老化による心身機能の低下によって、開放性など能力的側面に関わる人格特性は否定的・消極的になることが示されている（小室・藤田他，1989）。よって、開放性尺度の評定値が全体的に低いことは、むしろ妥当な結果であると思われる。しかしながら、本研究において大学生と専門学校生との間に意識差が見られたことについては、実習などを通して高齢者の行動を見てきた専門学校生の評価を基準をもとにしてみれば、大学生の方が高齢者の開放性に対しては過剰に低い評価を行っていると解釈することができよう。近年では欧米型の介護

《開放性尺度》

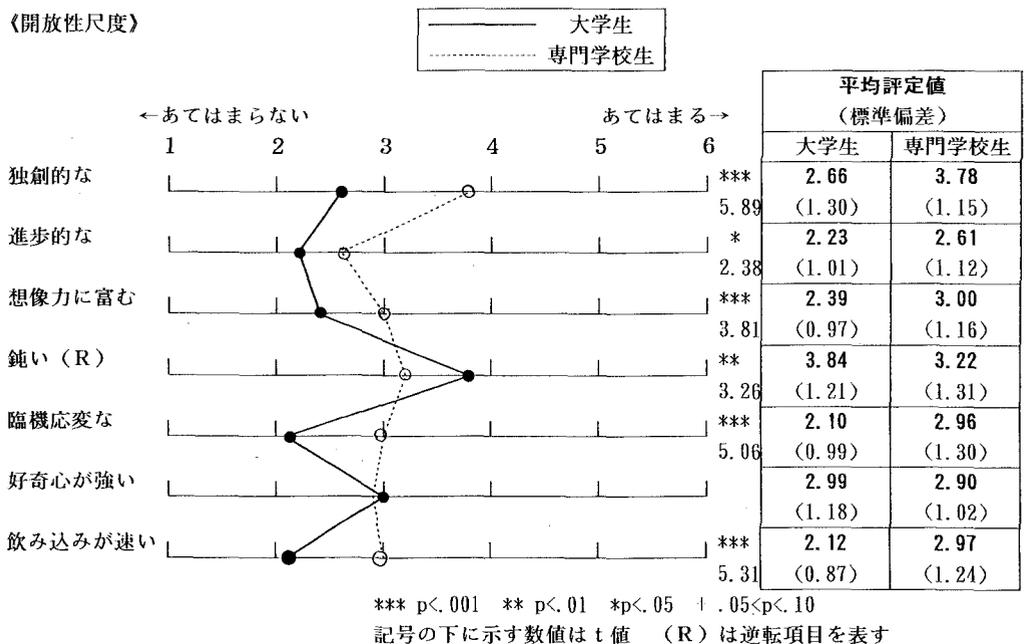


図4 開放性尺度のプロフィール

スタイルに基づき、特別養護老人ホームにいる高齢者には、痴呆などの知能低下状態である場合などを除き、QOL（Quality of life）を維持できるよう、身辺の処理などについては、可能な限り自立をはかる傾向にある。それゆえ、専門学校生は実習などの経験を通して自発的に行動しようとする高齢者の姿を見て評定を行ったのに対し、大学生の場合、単なる旧来のイメージや個人的な狭い知見を通しての評定となったために、このような意識差が生じたと考えられる。

4.5. 全体的考察

以上の調査を通して、高齢者の人格的イメージに関し、本学の大学生と介護福祉専門学校生との間に様々な点で意識差が存在することが明らかにされた。

外向性尺度に関しては、対外的に関わりを持ちたいという意識はあるが、実際には、主体的・積極的に働きかけることは少ないだろう、と捉えられていることが明らかにされた。神経症的傾向尺度については、全体的に評定値が高く、「不安な」や「心配な」という項目で特に高い評定値が見られた。このことから、大学生や専門学校生は、高齢者の人格特性のうち神経症的な側面に特に注目していることが示唆された。調和性尺度に関しては、大学生と専門学校生との共通した見解として、「温和な」や「親切的な」という円熟型の人格イメージであると捉えられていることが明らかにされた。開放性尺度については、全体的に低い評定がなされており、かつ、多くの項目で大学生と専門学校生との間に意識差が見られた。これらのことから、大学生は専門学校生よりも、開放性に関しては過剰に低く評価していると結論づけてよいであろう。

ところで、高齢者に関する実態研究から、高齢者の人格は生育歴や職業などの影響が大きく、そのため、能力の低下と人格は深い関連があるといわれている（長嶋、小室・藤田他、1989より引用）。そこで、高齢者の能力的側面に焦点を当てて見ると、堀（1992）は、WAIS-Rを通して、言語性知能は若年層と比較して差がほとんど見られないこと、感覚記憶や短期記憶の低下は認められるものの、長期記憶の低下はほとんど見られないことなどを明らかにしている。このような事実は、専門でない大学生にはあまり知られていないものであろう。また、このことから、開放性が過剰に低く評価されていることは、必ずしも一般的に言える実態とは異なるものであると言えよう。即ち、痴呆などの一部の病的イメージが一般化してしまうことや、佐藤（1995）の言う、コホートの効果や時代背景の変化の影響して若者との違いが際立つ面が、いかにも高齢者特有の傾向であるかのように捉えられてしまうことなどが指摘される。この傾向は、高齢者に関する積極的理解・学習の場が与えられない限り、ずっと実態と乖離したイメージが抱かれるであろう。

以上のことから、教員を志望する大学生には、今後の高齢化社会に向けて、高齢者に対する正しい認識が必要とされ、さらに、学校教育においても高齢化社会に関する学習の場が与えられることが必要であると思われる。

最後に、従来の研究において、老人に対するイメージの研究は多く見られるが、その方法は、自由記述法やSD法など様々であった。本調査で用いられたBig Five尺度は、個人を共通特性からなる多次元空間の一つの布置として捉える方法として、Norman（1963）に端を発し、多くの研究を通して確立されてきた人格特性の因子構造であり、その応用的研究が注目されるものであった（和田、1996）。本調査のように標準化された尺度による高齢者の人格的イメージの検討は、従来の研究には見られなかったことから、その点に本研究の意義があると考えられる。一方、本調査の問題点としては、Big Five尺度のうちの「誠実性」について結果が得られなかったこと

が挙げられる。これは、予備調査において、「誠実性」の項目採択に有効な数をもつ回答が得られなかったためである。しかしながら、Big Fiveの検討においては、従来の研究から常に5因子が安定して抽出されてきている(和田, 1996)ことから、今後、「誠実性」の尺度についても検討を行い、5因子から総合的に人格的イメージを考察する必要があると思われる。

参考・引用文献

- 菱沼典子・太田喜久子・小山真理子・清真佐子・田村正枝・村嶋幸代 1995「看護学生の老人イメージについての一考察」、『看護教育』36、730-735.
- 堀薫夫 1992「高齢者の知力に関する調査研究－ウェクスラー成人知能検査を用いて－」、『福井県立短期大学紀要』17、117-125.
- 保坂久美子・袖井孝子 1986「大学生の老人観」、『老年社会科学』8、103-116.
- 保坂久美子・袖井孝子 1987「大学生の老人イメージ－SD法による分析－」、『社会老年学』27、22-33.
- 小室豊允・藤田綾子他 1989『老人の健康と心理』東京 中央法規出版
- 守屋滝乃・稲垣宣子・鈴木偉代・夏目みつ子 1987「「老人」に対する意識調査－三代における「老人観」と老人イメージ－」、『看護教育』28、537-541.
- 落合正行 1996「介護の抵抗に関する心理学的研究」平成5年度～7年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 大西百々代 1996「職業(対象)別；老人のイメージを通して老人理解を深めるための教育的取り組み」、『第4回日本介護福祉学会研究発表論文集』92-93.
- 佐藤真一 1995「老年期のパーソナリティとポジティブな心理機能」、『高齢者のケアと行動科学』2、3-15.
- 和田さゆり 1996「性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成」、『心理学研究』67、61-67.
- 山井和則 1990『体験ルポ 世界の高齢者福祉』東京 岩波書店

謝 辞

本調査のデータ収集に際し、本学藤田正先生及び受講生の皆さん、吉住学園関西国際社会福祉専門学校浅野和代先生及び受講生の皆さんのご協力を得ました。また、本論文の作成に関して、龍谷大学短期大学部大西百々代先生、本学杉村健先生、豊田弘司先生より貴重なご意見・ご助力を賜りました。さらに、データ整理に関し、本学大学院教育心理学専修の三木馨君、上松幸一君、片岡真理さんのご協力を得ました。記して心より感謝申し上げます。